

東南アジアの肺吸虫症および肝吸虫症

横 川 宗 雄 (千葉大医学部)

肺吸虫および肝吸虫はいずれもその発育史は似ており、第1中間宿主は淡水産の貝類で、第2中間宿主は前者が淡水産のカニ類、後者が淡水産の魚類である。従って両種吸虫類の分布は、主として河川の流域に限られており、又感染者も、これらの魚介類を生食する風習のある地域にみられる。ところが開発途上にある東南アジア諸国では、これらの感染源である魚介類は、重要な蛋白源として摂取されている場合が多いので、これら疾病の予防撲滅は必ずしも容易ではない。しかし現在では、両種吸虫症とも、極めて容易に治療が出来るようになったので、感染者の発見、および治療を徹底的に行なえば、感染率を低下させることは必ずしも困難ではないと思われる。

そこでまず両種吸虫感染症の流行地における調査法(スクリーニング法)について、皮内反応、補体結合反応などの血清学的診断法の実用的価値および検便法

について説明すると共に、これまでに調査された各地域のまんえん状況についても説明する。次いで感染者の集団治療法についてもふれることにしたい。

又疫学的に特に重要な点はこれら両種吸虫の人以外の自然界の終宿主についての調査とともに、これら吸虫類の種類とその分布を明確にすることである。たとえば、肺吸虫にはその種類が甚だ多く、東南アジア地域からだけで十数種が報告されているが、それらのうちウエステルマン肺吸虫 (*Paragonimus Westermanni*) 以外に人体から見出された種類も含まれている。

又肝吸虫には、*Clonorchis sinensis* と *Opisthorchis viverrini*, および *O. felineus* の3種があるが、そのうち *C. sinensis* は主として日本、台湾、韓国、中国などに広くみられるが、*Opisthorchis viverrini* は主としてタイ国およびカンボジアに高度にまんえんしている。しかしこれに境を持するベトナムにみられる種類は、*Clonorchis sinensis* といわれている。今後更に両種の正確な分布を調査する必要がある。

第2主題 ウイルス性疾患

座 長: 東

昇 (京大)

チクングニアウイルスの増殖に関する電子顕微鏡学的研究

東 昇 (京大ウイルス研究所)

松 本 明 (")

伊藤利根太郎 (タイ国立ウイルス研究所)

緒 方 隆 幸 (")

清 水 明 (")

タイ出血熱の病原体チクングニアウイルスの性状については全く知られていなかった。著者等はこのウイルスの培養細胞内増殖様式を電子顕微鏡学的に研究し、ウイルス粒子の性状、増殖様式等について知見を得たので報告する。

材料と方法: 供試したウイルスは BaH 306 株で、

乳呑みマウス脳7代、ハムスター腎細胞3代通過後、サル(タイ国産 *Cynomolgus*)腎2代培養細胞に感染させたものである。感染後15時間より CPE が現れ始め、20時間後に著明となり、30時間で細胞はガラス壁より脱落する。電顕試料には感染20時間の細胞を供し、形の如くオスミック酸固定後、包埋し超薄切片として観察した。

成績: 数多くの観察の結果、1. 増殖様式、2. ウイルス粒子の性状、3. 不完全ウイルス粒子等に関して次のような成績を得た。

1. 増殖様式

1) ウイルス粒子は細胞外に遊離あるいは細胞質膜に接して存在し、細胞内ではほとんど認められない。

2) 電子密の core をもったウイルス粒子の出芽像